



令和元年度第48期臨床研修医修了式にて。21名が元気に巣立っていきました！

診療科紹介 update

Vol.4 外科(肝胆脾)

臨床研修修了報告

TOPICS

- ・医師人事異動(転出)
- ・定年退職を迎えて
- ・遊歩道が整備されました。
- ・看護師の特定行為研修を開催します

雲仙普賢岳大火砕流で被災した患者の
主治医となった研修医

Vol.2「雲仙普賢岳噴火の
災害救急医療に関する記録」

臨床検査科だより Vol.2

看護部だより Vol.19

長與 専齋(1838年～1902年)

大村藩御殿医の家系に生まれる。緒方洪庵の適塾に学び、福澤諭吉の後を襲い塾頭となる。初代衛生局長として我が国の近代医療制度の確立に尽力した。衛生という言葉をはじめ採用したのも専齋である。専齋の生家は「宜雨宜晴亭」と呼ばれ、長崎医療センター敷地内に移築されている。

診療科紹介

Update

Vol.4



肝胆膵疾患合同カンファレンスの様子。
各領域の専門家が集合、一例一例を検討し、
根治を目指して治療方針を決定しています。

外科(肝胆膵)

肝胆膵外科のモットー

- ・ 安全性を最優先に手術を行います
- ・ 治療の質はより高く、患者さんの負担はより低く
- ・ 肝胆膵がんの長期生存を目指します
- ・ 急性期疾患にも迅速に対応します

スタッフ

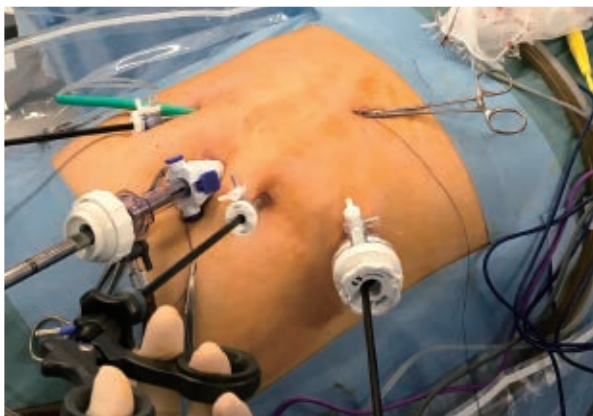
当院の外科は、臓器別に5つのグループに分かれており、肝胆膵外科チームはその一つです。肝胆膵外科チームは、黒木保臨床研究センター長、夏田孔史医長、山下万平医師の3名とレジデント・研修医で構成され、日々肝胆膵疾患の治療に取り組んでいます。黒木は肝胆膵外科高度技能指導医であり、内視鏡外科技術認定医でもあります。施設としては、肝胆膵外科のレベルのものさしである高度技能専門医修練施設Aに認定されています。長崎県内では長崎大学病院と当院の2つが修練施設Aとなっています。

高度肝胆膵手術への取り組み

日本肝胆膵外科学会で高度手術と認定されている手術（肝臓葉切除や膵頭十二指腸切除術など）を年間に50例以上行っております。肝胆膵癌は消化器癌の中でも悪性度が高く、進行が速い場合は手術ができない場合もあります。当院では、消化器内科と連携して抗癌剤を投与し、癌を縮小させることで根治手術可能とする手術前治療も積極的に取り入れています。放射線治療、抗癌剤治療と手術とを組み合わせることで肝胆膵がんの予後は次第に改善してきており、5年生存率は全国平均以上となっています。

患者さんの負担を減らす手術

肝胆膵手術は、大きな侵襲を伴い、患者さんに大きな負担をかけてきました。私たちは患者さんの負担を減らし、かつ、“きず”を小さくすることで痛みが少なく社会復帰の早い内視鏡手術を積極的に取り入れています。また、私たち肝胆膵外科チームは、内視鏡外科技術認定と肝胆膵高度外科技能認定の双方の資格を有した専属医師が手術を担当するため、手術の根治性を低下させることはありません。



きずの小さな腹腔鏡下肝胆膵手術の様子。



蛍光色素で腫瘍を光らせて分かりにくい病変部を同定します。

肝胆膵急性期疾患に対する迅速な対応

肝胆膵疾患には、急性胆嚢炎に代表される急性期疾患も多く、近年増加傾向にあります。急性期疾患では、迅速な対応が必要とされ緊急手術を要する場合も多く、救急車での搬送も日々行われています。私たちは内科、放射線科、麻酔科などと協力して迅速に対応し、県央地区の最後の“とりで”としての役割を果たしています。

最後に

肝胆膵癌において、診断がついた時点ですでに手術適応のボーダーラインとされる症例も決して稀ではありません。私たちは患者さんの全身状態が手術に耐えうると判断した場合、計画的な術前化学療法、血管合併切除、他臓器合併切除、残肝容積の増大を図る門脈塞栓術などの技術を駆使して根治切除を追求します。一方、肝胆膵疾患には鑑別すべき疾患も多く確定診断に至らない症例も多くあります。手術適応に迷われた場合、ご相談いただければと思います。

2年間を振り返って 臨床研修 修了報告



2年間の初期臨床研修を終え、医師としてそれぞれが専門分野を定めて歩き始めるスタート地点に立ちました。各科のローテーションで印象に残った出来事を振り返ります。“2019年12月までの思い出とともに”



入社式

救急科

救急外来対応からICU管理まで幅広く学ばせていただきました。一般病棟とは違った緊張感がありましたが、先生方の熱心なご指導のおかげで非常に充実した研修を送ることが出来ました。重症な患者さんに対しても素早く冷静な判断を下される先生方を尊敬しています。

吉良恵理子

耳鼻咽喉科

基本的な診察の仕方、所見の取り方を学ぶことができ、内視鏡、気管切開、嚥下検査など様々な手技を経験することができました。先生方はとても優しく指導してくださり、教わったことはその後の研修でもとても役に立ちました。1ヶ月間の研修でしたが、研修が終わった後も会うたびにお声をかけてくださり、本当にありがたかったです。

藤川堯之

腎臓内科

腎臓内科では、末期腎不全の患者さんや血液透析・腹膜透析の管理の仕方などを学びました。シャント穿刺やPTA、FTRカテーテル挿入など手技も多く経験することができました。先生方もとても優しく指導していただき非常に楽しい研修を送ることが出来ました。ありがとうございました。

西田明弘

外科

外科は黒木先生をはじめとして、とにかく明るい雰囲気、院内外で常に全力投球でした。花見や歓迎会、BBQなど、楽しい思い出がたくさんです。手術、カンファ、学会と忙しかったですが、先生方に指導頂き、外科の基礎を学ぶことができたと思います。本当にありがとうございました。

山口修平

整形外科

丁度、研修した時期が冬の季節で、転倒による大腿骨頭骨折の手術に頻繁に入ることができ、髓内釘も実際に執刀させて頂き、非常に勉強になりました。四肢切断や、関節リウマチによる外反母趾の矯正手術や先生方の外来にもはいらせていただき、貴重な経験ができました。忘年会では、普段中々関わりのないリハ科の方々ともお話できました。また、リハ科の方や整形の先生に自分が患者としてお世話になることもあり、その節は非常にお世話になりました。ありがとうございました。

松永千子



大村公園にて

放射線科

治療と診断両方を経験でき、主に読影を中心に研修をさせていただきました。teaching fileで勉強する以外に、先生方が読影している症例と一緒に見て話すことができ大変勉強になりました。優しく指導熱心な先生ばかりで、忙しい中でも時間を作ってくくださったので感謝しています。

高木 怜子

消化器内科

消化管内科と肝臓内科を同時に研修させて頂くという環境で、それぞれの科で指導医の先生の熱心で丁寧な指導がありとても勉強になる毎日でした。また学会発表に関しても積極的に関与させて頂きました。本当にありがとうございました。

花田 駿



忘年会

形成外科

小さな切り傷から交通外傷、先天奇形など、多岐にわたる非常に豊富な症例をみて経験することができ、更には診療部長の熱いご指導が非常に印象的でした。先生方の確かな診療や技術に憧れ、将来を考えていくにあたり大きな影響を受けました。

松本 紘子



嬉野合宿

血液内科

まだ病棟管理もままならない時期にも関わらず、診断から治療方針、手技に至るまで、血液内科の先生方全員で教えてくださる、手厚い指導が印象的でした。濃密な研修環境を作っていただきありがとうございました。年末恒例のすき焼き忘年会も最高でした!!

中谷 優

循環器内科

循環器内科では心不全管理からカテーテル治療まで幅広い分野について学ぶことができました。診療科の雰囲気も明るく、カンファレンスが活発だったのが印象に残っています。またデータ解析や学会発表の機会も与えていただき、充実した研修を受けることができました。

瀬戸口 章仁

麻酔科

全身管理のスペシャリストの指導の下、術中の循環・呼吸はもちろん術前の耐術能や術後の疼痛管理など周術期に関して総合的かつ専門的に学ぶことができ、気管挿管や中心静脈路確保など多くの経験を積むことができました。指導医の先生方は些細な疑問に対して、優しくスマートで明確に解決してくれるので、とても尊敬できます。長崎医療センター麻酔科で培った経験を基に今後もより一層研鑽を積み重ねたいと思います。

村上 侑

病理診断科

将来すすむ診療科である事もあり、切り出しから診断まで多くの経験させていただきました。CPCをはじめ、学会発表における指導も手厚く、楽しく充実した研修でした。

当院は幅広い診療科があり、検体も豊富である事からも、将来病理診断科にすすまない研修医にも是非ローテーションしていただきたいと思いました。

添田 李子



産婦人科

胎児のエコーや婦人科手術の助手、帝王切開の執刀など、様々なことを経験させていただき、妊娠・分娩管理の難しさや素晴らしさ、婦人科腫瘍の奥深さを学ぶことができました。3ヶ月の研修を通して、生涯をかけて極めたい科だと改めて感じました。

小川真幸

泌尿器科

多くの手術がありましたが優しくご指導頂き、小話もあり楽しく手術に参加できました。憧れの腎移植に参加できたことや尿路結石をゴリッゴリに削らせて頂いたことが特に思い出深いです。入りにくい尿カテへの救世主としての姿も格好良く、私も学んだことを活かし、救世主の仲間入りが出来ればいいと思います。ご指導ありがとうございました！

大野渚



眼科

先生方に優しく丁寧な指導をいただきながら、充実した研修を行うことができました。外来では、様々な眼科疾患で実際に困っている人の存在を知り、眼科の重要性を感じました。手術室では、白内障から小児眼科、硝子体手術など多くの手術を経験し、眼科手術の魅力を教えていただきました。NICU診察も当院ならではの、思い出深い研修となりました。

大槻早紀

地域研修

上五島病院にて内科研修を3ヶ月間させていただきました。感染症から化学療法、果ては透析患者の管理まで必要とされるものは幅広く、普段とは必要とされるものは幅広く、普段とは異なる、よりプライマリな環境で、臨床を経験することができました。また、床を経験することができました。また、お互いの専門を補い合い、協力し合う上級医の先生方の姿勢も非常に印象的でした。後輩たちにもオススメの地域研修です。ありがとうございました！

安田淳

リウマチ・内分泌代謝科

内科医として基本的に必要な能力を身につけるだけでなく、外来・入院・対診・緊急など様々な場で専門的な対応を学ばせていただきました。症例を通して、長い経過で同じ患者に関わっていくやりがいを感じることができました。また、興味深い症例にも恵まれ、学会発表を3回もさせていただきました。熱心にご指導くださりありがとうございました。

松下雄太

総合診療科

COMMONな疾患に対する見識を深める機会となっただけでなく、終末期、ACPなど患者さんの人生に寄り添う医療の在り方を考える経験ができました。スタッフ、レジデントの先生方、忙しい中にも笑顔のあふれる充実した日々をありがとうございました！

野中双葉

神経内科

当院は急性期病院であり、脳卒中を中心とした急性期疾患を中心に担当させていただきました。さらに外来で慢性疾患も診させていただきました。指導医の先生方のフォローアップは手厚く、専門的技技だけでなく、内科全般の技技、検査などをさせていただきました。専門的内容だけでなく、内科診療全般を学ぶことができ、神経内科を選択したのは正解だったと断言できる非常に濃密な研修でした。

吉原聖智



2年間を振り返って 臨床研修 修了報告

小児科

新生児から小児の診察、採血、救急対応など1つ1つ丁寧にご指導いただきました。毎日少しずつ成長する姿、入院時ぐったりしていた子が笑顔になっていくのを見ることができ、嬉しく思ったのを覚えています。ありがとうございました。

戸野本麗沙

呼吸器内科

感染症、悪性腫瘍、びまん性肺疾患など、幅広い症例を学ぶことが出来ました。気管支鏡やドレーン留置などの手技も、忙しい中熱心に指導していただき感謝しています。学会発表や勉強会も非常に貴重な経験となりました。

瀬戸口大地

精神科

当院は主にリエゾン・コンサルテーションということであり様々な病棟を行き来して依頼のあった入院患者の診察や内服薬調整などの考え方を勉強になりました。またほぼ毎週、睡眠薬や抗うつなどもしていただき大変勉強になりました。

小淵幸稔

研修修了おめでとうございます。先生方の研修期間中は、コロナウイルスをはじめとする感染症問題、医師の働き方改革の開始、専門医制度のシーリング導入など激動の2年間でした。しかし、そのような中、みなさんは立派に2年間の研修を終えられました。これからの10年は医師として人として大切な時期になります。以下の3つを忘れずに3年目からの専門研修、その後のキャリア形成、プライベートの充実がんばってください。1. ロールモデルとなるメンターを見つけてください。2. 誠実に生きてください(人に対して、仕事に対して、自分自身に対して)。3. 目標に向かって熱意、努力をもって取り組んでください。これから様々な困難にぶつかることもあるかと思いますが、同期との絆を大切に、長崎医療センターの卒業生としての誇りをもって精進してください。みなさんのご活躍を心から祈っています。そして、またいつかお会いできる日を楽しみにしています。

臨床研修管理委員長 長岡進矢

TOPICS

医師人事異動(転出)

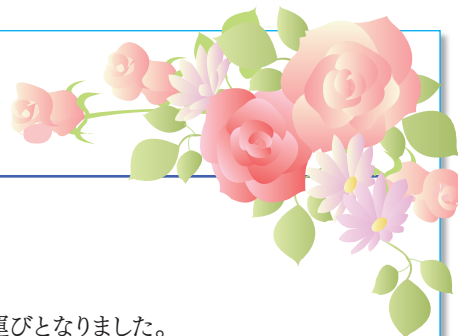
医療職(一)医師

脳神経外科医長	牛島 隆二郎
脳神経外科医長	日宇 健
耳鼻咽喉科医長	吉田 晴郎
泌尿器科医長	鹿子木 桂
外科医長	夏田 孔史
血液内科医長	加藤 丈晴
肝臓内科医師	橋元 悟
呼吸器外科医師	町野 隆介
外科医師	小林 慎一郎
循環器内科医師	三輪 高士
呼吸器内科医師	行徳 宏
腎臓内科医師	川口 祐輝
整形外科医師	飯田 健
整形外科医師	野中 俊宏
産婦人科医師	五十川 智司
麻酔科医師	金子 翔平

医療職(一)レジデント・専修医

内科専攻医	内山 憲一郎
内科専攻医	田島 浩之
内科専攻医	山元 暢
総合診療科レジデント	田島 まり江
小児科専攻医	倉田 奈央
小児科レジデント	有森 諒太郎
小児科レジデント	種岡 飛翔
小児科レジデント	川村 遥
皮膚科レジデント	中島 真帆
形成外科レジデント	鈴木 はるか
泌尿器科レジデント	倉田 博基
消化器内科レジデント	田中 久也
肝臓内科専攻医	西原 敬仁
放射線科レジデント	大塚 哲洋
精神科レジデント	田中 大三
外科レジデント	野田 恵佑
呼吸器内科レジデント	矢田 秀雄
脳神経外科専攻医	松尾 彩香
腎臓内科レジデント	山口 貢正
神経内科レジデント	忽那 史也
麻酔科レジデント	松本 舞

定年退職を迎えて



産婦人科医長
楠田 展子

この度、3月31日をもって定年退職の運びとなりました。

長崎医療センターには、国立長崎中央病院の頃から、3度勤務させていただき、今回は2003年5月より長きにわたり勤務させていただきました。この間、多くの方々にお世話になり、心から感謝し、お礼申し上げます。

これからは、いったん休養したのち、社会貢献できることを見つけて、有意義に過ごしたいと思っています。

長崎医療センターの益々のご発展と、皆様のご健康とご活躍を祈念しています。



事務部長
藤野 弘幸

昭和53年に国立大阪病院に就職し、平成元年、福岡に転勤して以来、佐賀、長崎、大分、宮崎、沖縄県など九州の国立病院や療養所を転々とし、福岡県以外は、ほぼ単身で観光も満喫しました。また、九州地方医務局（現九州グループ）では国立病院・療養所の再編成業務などにも携わりました。

当院には平成30年からでしたが、この間、働き方改革、感染症アウトブレイク、病院機能評価受審など内容の濃い2年間でした。

4月からは、米倉先生（長崎県病院企業団企業長）からお声をかけて頂き、長崎県五島中央病院で働くことになりました。ドクターヘリなど長崎医療センターにも引き続きお世話になります。離島という違った環境の中ではありますが、これまでの経験を活かして精一杯頑張りたいと思います。

長きにわたり大過なく勤めさせていただくことができましたのもひとえに皆様方のご厚情とご指導のたまものと感謝の気持ちで一杯です。心から厚く御礼申し上げます。

長崎医療センターの今後益々のご発展を祈念し挨拶いたします。



臨床検査技師長
沖 茂彦

私は昭和60年に国立病院に入職して以降、機構病院を併せると約35年間を臨床検査技師として勤務させていただきました。最後の5年間を臨床検査技師長として長崎医療センターに勤めさせていただいたことは、やり甲斐を感じるという面で本当に幸運だったと思います。楽しく充実した日々を送ることができたのも、病院幹部をはじめ伊東先生、三浦先生、松屋先生方のご理解と、一緒に汗を流してくれた検査科スタッフの協力があったからこそだと深く感謝しております。

退職後は自宅のある久留米に戻り、新しい職場で第2の人生を送る予定です。長崎医療センターの皆様、これまで大変お世話になりました。皆様の益々のご健勝ご活躍をお祈り申し上げます。

TOPICS

遊歩道が整備されました。

管理課長 島田 登志男

この度退職される藤野事務部長のご厚意により、バス停裏の遊歩道を整備していただきました。病院の患者さんの為にと、雨の日など足元の悪い状況が改善されました。誠にありがとうございました。



TOPICS

看護師の特定行為研修を開催します



令和2年2月26日付で厚生労働省より、特定行為研修指定研修機関（指定研修機関番号2042002）として当院が指定されました。そのため、令和2年6月1日より特定行為研修を開講いたします。当院が実施する特定行為研修は、下記の4区分です。

当院が担う高度急性期医療の現場を活用し、急性期医療から在宅医療において、地域の医療機関の看護の質向上に貢献したいと思っています。

長崎医療センターが実施する特定行為区分（4区分）

- 呼吸器（人工呼吸療法に係るもの）関連
- 呼吸器（長期呼吸療法に係るもの）関連
- 栄養及び水分管理に係る薬剤投与関連
- 血糖コントロールに係る薬剤投与関連

研修期間：令和2年6月1日～令和3年1月29日（8か月）

出願期間：令和2年4月1日～4月20日（当日必着）

興味のある方は、詳細を当院ホームページでご確認ください

雲仙普賢岳大火山砕流で
被災した患者の主治医となった研修医

国立病院機構長崎医療センター
副院長 八橋弘

Vol.2 「雲仙普賢岳噴火の 災害救急医療に関する記録」

当院での雲仙普賢岳噴火の災害救急医療に関する記録は、平成3年9月1日に発刊された当時の院内広報誌「長崎中央」に詳細に記載されている。

災害対策本部の設置

普賢岳は平成2年11月17日に二百年振りに噴火を始めた。平成3年5月、梅雨入り前に水無川に土石流が発生した。5月20日には今まで見たことも無いような溶岩ドームが出現した。同日、寺本成美院長は幹部職員を招集し、院長を本部長とする災害医療対策本部を設置するように指示を出した。医師スタッフは、火砕流と土石流の災害医療に分けてチームが編成され、救護班も救命救急センターの主幹（当時は専任の救命救急医はいなくて中田俊則外科医長が主幹を併任されていた）を中心に、医師、看護師、事務部、救急車の運転手を1クールとする2班が編成された。5月26日、火砕流が民家に迫り最初の負傷者が出た。

大規模火砕流発生

6月3日、15時50分頃、これまでにない大規模の火砕流が発生し、民家まで押し寄せ、死亡者、負傷者が多数発生したとTVの臨時ニュースが流れた。焦土化した人家、自動車、被災者、火災流の状況が生中継で放送された。寺本院長から当院の対策本部関係者に待機指示が出され、緊急体制に備えた。

火砕流による重症患者の収集依頼

16時55分、島原保健所から多数の火砕流による負傷者が発生したが、島原温泉病院（現在の長崎県島原病院）で救急処置をおこなっているが対応できないので重症患者9名を当院へ収容してほしいと依頼される。対策本部を立ち上げ、情報収集をおこなうも様々な情報が交錯した。馬場尚道副院長は、負傷患者は救命センターに収容するように指示を出し、現在、救命センターに入院している患者の後方の病棟への転棟が始まった。更に副院長は、各科医局に医師（フタフ、レジデント、研修医）の待機、薬局、放射線、検査科、各部門にも患者対応に全力をあげるように緊急連絡した。

17時35分、島原温泉病院から当院へ移送を開始するという連絡あり。（当時ドクターヘリはなく）救急車で搬送には1時間かかると思われた。玄関入口には、十台のストレッチャーが並べられ、酸素ボンベと救急蘇生器具の準備と確認が行われ、約60名の職員が玄関前に待機した。当院に重症患者が搬送されるという情報を入手した報道陣のカメラも病院玄関前に待機していたという。

患者の到着

18時45分、サイレンとともに火山灰を被った最初の救急車が病院玄関に到着した。救急隊員のヘルメット、ユニフォームも真っ黒であった。患者は男性1名、女性1名であった。その10分後に二台目の救急車が到着し男性患者1名の計3名が当院に搬送された。重度の火傷患者の状態でどのようであったかは医療従事者であれば想像できるであろう。病院玄関からストレッチャーに移された患者は救命救急センターに運ばれ、一人の患者に医師十数名が付き、崎戸徹形成外科医長を中心にチーム医療で気道確保、血管確保、減張切開治療が始まった。医師も看護師も目まぐるしく動き回り、職員の殺気だった声が飛び回った。また、報道関係者、警察からの問い合わせ、負傷患者の家族からの安否を気遣う電話が庶務課にひっきりなしにかかってくる。

20時、報道関係者の要望で院内にて緊急記者会見を行い、患者氏名、年齢、病状について馬場副院長から発表された。

22時10分、待機する職員数を縮小する指示が出された。

（以上、庶務課長田村記）

その後

9名の搬送予定患者のうち6名は、大学病院をはじめとするいくつかの病院に分散されて収容されたことがわかった。また、救命センターでの治療のかいもなく、当院に搬送された3名の患者のうち1名は2日後に、もう1名は22日後に亡くなった。22日目に亡くなったのが矢内万喜男氏である。

院内広報誌「長崎中央」平成3年9月1日発刊号から引用



現在の雲仙普賢岳

臨床検査科だより Vol.2

臨床検査科 西浦 哲哉

当院の臨床検査技師は、日常検査の経験と学会や研修会での研鑽を重ね、多岐に渡る専門学会の認定資格を取得しています。当院検査室には、細胞検査士4名、認定輸血検査技師1名、認定臨床微生物検査技師1名、超音波検査士6名(循環器4名、消化器5名、体表4名、泌尿器3名)が在籍しています。いずれも資格取得後4～5年ごとの更新が必要であり、日々の研鑽が必須です。今回は実際に当院で活躍中の4種類の認定資格について、御紹介いたします。

細胞検査士

日本臨床細胞学会が認定する資格で、ヒトから採取された細胞を色々な方法で染色し、顕微鏡で癌細胞を探し出す能力を認定するものです。筆記の一次試験と、実技の二次試験により判定され、合格率は20%を切る難関試験です。この資格を取得することで、細胞検査に関する深い知識と高度な技術を有する臨床検査技師であることが証明できます。



認定臨床微生物検査技師

臨床微生物学や感染症検査法についての高度な専門知識と技術を有する検査技師が認定され、受験資格審査には認定施設での研修や、臨床微生物学に関する筆頭者としての論文や学会発表が必須です。試験は実技と筆記があり、臨床微生物学の英文和訳などもあり難関です。資格取得により、臨床微生物学に関する高度な知識や技術を持ち、最新の検査法に対応できる熟練した微生物検査の専門家であることが証明されます。



認定輸血検査技師

輸血に関する正しい知識と的確な検査により輸血の安全性をめざすために始めた認定制度で、論文や学会発表等の業績と関連学会での活動成績による審査基準達成が必要となります。輸血は移植の一種であるとも考えられるように、副作用や合併症を伴い患者の命に関わる危険性があり、安全な輸血を行うためには深い知識と判断力、正確な技術が必要不可欠です。資格取得により、輸血に関する高度な知識と技術を身につけ、輸血の安全性の向上に貢献することができる臨床検査技師であることが証明できます。



超音波検査士

超音波検査は、技師の技量により結果が大きく左右されやすい検査であり、検査士の資格を得るには、筆記試験と症例レポートの提出を求められます。特に症例レポートは、所見を詳細に解説し、臨床経過、手術所見なども記載しなくてはならず、多くの実績を積み重ねなくてはなりません。資格取得により高度な超音波医学の知識と技術を持ち合わせていることが証明できます。



看護部だより Vol.19

1年目看護師の成長

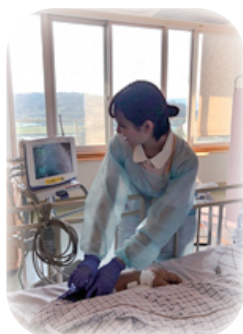
3A病棟副看護師長 玉屋 さつき

4月に入職した看護師もいよいよ先輩看護師になろうとしています。この1年間、レベルⅠ研修を担当させていただき、いろいろなことを学んで来た1年目看護師の成長を研修毎に感じることができました。業務の事や技術の習得など自分のことで精一杯だった1年目看護師も、「忙しくても患者さんにとってプラスになることを出来るように常に考えながら行動する」「患者さんにとって何が大切か、患者・家族の立場になって考えることを忘れず看護をする」といった患者さんにとっての良い看護とは何かを考えながら看護する姿勢がうかがえるようになりました。10か月目研修では多重課題・タイムマネジメントについての研修を行い、「多重課題がある時でも患者さんの命と安全を最優先に丁寧な看護をしていきたい。」「多重課題を起こさせないように予測して行動することや自分一人ではできないとなった時の応援要請のタイミングを考えて行動したい」「ナースコールを鳴らさない、先取り看護をできるようになりたい。」などの学びが来ていました。

これからは看護の幅も広がり看護の喜びや楽しみ、充実感を感じることも増えてくると思います。この1年間を通して経験し学んだことを活かし、今後は先輩看護師としての成長を期待しています。これからも一緒に頑張っていきましょう。

研修内容

- 4月：社会人としての1か月の共有
- 5月：職員の一員としての自覚
- 6月：看護技術研修；輸液ポンプ、シリンジポンプ、酸素ボンベ
- 7月：夜間勤務の心構え
- 10月：自己の成長発見、心の健康を維持するための方法について
- 11月：看護技術研修；フィジカルアセスメント
- 12月：リスクマネジメント
- 1月：多重課題・タイムマネジメント
- 3月：1年間の振り返り、自己の成長と課題の明確化



理念

高い水準の知識と技術を培い
さわやかな笑顔と真心で
患者さん一人一人の人格を尊重し
高度医療の提供をめざす

長崎医療センターの使命

長崎医療センターは以下の活動を誠実に行之、地域拠点病院として住民の皆さんと医療機関からの信頼を得ることを使命としています。

- 安全で質の高い医療を提供する
- 絶対に断らない救急医療の最後の砦となる気概を持つ
- 地域の医療機関、行政と密接に連携する
- すべての医療人と学生に魅力的な教育研修を提供する
- 臨床研究を推進し、国際医療協力を貢献する